

憂ふべき光景である。

將來に數々の重大問題を殘すこの姿を後にして、我々は黃色人の世界に暇を告げシベリヤ經由歸國の途についた。匪賊の襲來に對して我々

の列車を保護する日滿兩國の兵士が、銃劍を光らせながら無關心に我々を見送つてゐる。

シュレーベル氏極東旅行記抄釋

(イリュストラシヨン誌八月十日號)

南懷仁が支那に紹介した世界地理書に就て (一)

鮎澤 信太郎

目次

- 一、はしがき
- 二、南懷仁略歴
- 三、西方要紀
- 四、坤輿圖說
- 五、坤輿全圖
- 六、坤輿外紀
- 七、東洋史上に及ぼせる影響
- 八、結語

南懷仁が支那に紹介した世界地理書に就て

一、はしがき

新發田收藏の著^{各國}萬國地名捷覽(嘉永癸丑刊)に記す窪田茂遂の序にも、西洋地理學の精詳を記し、つゞいて「如我皇邦、四緣海岸、舉岬、屈曲平直、內地山脈水路、州郡城郭、條分縷折、精于邦人所製之圖數等矣、而尙以禽獸視之可乎、」云々と述べられてゐる如く、江戸時代(支那にては明末より清末に至る時代)世界地理を學ぶ者は

皆之に依つて啓蒙され所謂中華思想を捨て、新しい世界を認めるやうになつた。そして更に其の結果は本田利明の西域物語の如く開國通商貿易の急務なるを論ずるに至る。

此がやがて明治維新展開の精神的動力の一となる。筆者の扱ふ近世東洋に於ける世界地理學史の諸問題は總てかゝる歴史的論證の素材たらしめようとの意圖のもとに行はれるのである。従つて純地理學史的研究は筆者の最後の目的ではなく、又主として歴史を學ぶ者の能く爲し得べきものでもなからう。此方面は勿論地理學専門の諸士に待たねばならないのである。こゝに見る南懷仁の世界地理も右の如き意味から調査されるのである。

さて明末清初、耶蘇會士が其の布教手段として中國に紹介した泰西科學の中、世界地理に關するものに就き、私は既に利瑪竇（日本大學文學科研究年報第一輯）・艾儒略（地球二三の五、二四の二）等の其を説述した。其等の續篇とし

てこゝに南懷仁の支那に紹介した世界地理書並にその影響に就て記して見たい。

二、南懷仁略歴

フルデナンド・フルビースト (Ferdinand Verbiest) 漢名を南懷仁と云ふ。一六二三年十月二九日、白耳義のピテム (Pihem) に生れ、長じて耶蘇會に入つた。マルチニ (Martini)・クープレ (Couplet) 等と共に一六五六年デノアより支那に向つて出帆したが、途中地中海で佛蘭西の海賊船に捕へられ、贖ひ回されて出發を改めた。其の航海は苦難に充ちたものであつたが一六五八年七月に澳門に着き、其の翌年には支那に入ることが出來た。彼は西安府に送られたが幾何もなく順治帝に依つて北京に召されたので、實際布教生活は極めて短い間であつた。一六六〇年に京師に到着した彼は先輩湯若望の後繼者として、湯氏の助手となり、主として湯氏の當つてゐた天文に關する事業を輔佐した。此時、文書や製圖等のことは後に見る西方要紀の

共著者安文思(P. Gabriel de Magalhães)が、
實驗(化學)・製作等のことは同じく利類思(P.
Ludovicus Buglio)が各々分擔することになつ
た。

一六六四年、順治帝の死後、しばらく政權が
攝政の下にあつた時、彼等四人の宣教師は曾て
湯若望の爲に其の椅子を失つた欽天監員楊光先
の爲に誣陷を受け、官人たる湯氏は別として他
の三名は一六六四年十一月十六日より一六六五
年四月十五日に至る間鐵窓につながれ、斷罪の
結果は湯氏が死刑に、他の三人は杖刑の上追放の
刑に處せられることとなり、一方歐洲より連
行された二四人の宣教師達は廣東に追放され
た。たまたま此時北京地方に大地震が引續いて
起つたが輔政大臣等はこれは宣教師等に對する
刑獄の正しからざるに依るものであらうと、三
名の者は自由を與へられた。然し南氏は湯氏の
解放をも要求して自ら解放されることを拒ん
だ。時、又宮廷に失火のことが起り、湯氏をも

當局をして解放の止むなきに至らしめた。然し
湯氏は其れより一年を経ずして、復職の日をも
見ず、一六六六年八月十五日他界し、後に残る
南氏と其の同僚はあらゆる困難を忍んで北京に
ふみ留つた。其の甲斐はあつて、康熙帝親政の
時に至ると、帝は先づ再三の試験を以て嚴重な
る競争を行はせ、南氏の數學・天文の力量を認
め、其結果その天文曆法に誤り多き楊光先を免
職し、一六六九年二月には南氏が代つて欽天監
に任ぜられた。耶蘇會士等は此に依つて彼等の
地位に對する不安を一掃したわけではなかつた
が、康熙帝は彼等に對して年一年と厚意を示し
遂には唯獨り南懷仁と對座して日々幾何學や天
文學の學習に專念するに至つた。南氏は一方亦
自ら滿洲語を學び、その文法書を著し、又、所
謂三藩の大反亂が起つた時には舊砲の修繕、精
銳なる新砲の製作を命ぜられた。彼は又漢文で
銃砲製造法の書物(神威圖說?)を著したと傳へ
られるが現存するものを知らない。

康熙帝は南氏の奉仕を認め、彼に種々厚遇を與へ、又一六七一年には南氏の言を容れて廣東にあつた宣教師達の内地宣教を許可するに至つた。此時廣東に在つた宣教師の中曆法に通曉する獨逸人ヘルドリヒト(思理格)・伊太利人グリマルデ(閔明我)の二名は南氏の要請によつて北京に招かれ、後更に有名な徐日昇(Perera, Thomas)も之に加へられて上京した。南氏は所謂儀禮問題(the controversy about rites)に關する悩みから逃れることが出来たが、この徐日昇との爭論を持たねばならなかつた。

彼は支那に於いて衰へつゝある葡萄牙の勢力を看取し、佛蘭西王に佛國耶蘇會士の派遣を誘引したが葡萄牙人である徐日昇は此と見解を異にしてゐた。南氏は亦彼の官位と公職の爲に中傷と嫉みの對象となり、實際上布教手段として彼が數學の仕事を爲すことは許容されねばならないことを幾度か法王に書き送らねばならなかつた。

然し、南氏は益々康熙帝に重用され帝の領内巡行の一行に、又領土擴張の遠征に常に伴はれ泰西科學を進講し或は又清廷と外國使臣との間の通譯として用ゐられたこともあつたその際、カルビン派である和蘭に好意を寄せたとは考へられないが、彼は澳門の小さい入支の關門に對して心痛して居り、一方、實現し得べき宣教師等の陸路入支の路に望を持つてゐたので、露西亞に對しては好意を持つてゐたと考へられる。南氏はやがて教會管理に關する仕事は徐日昇に依つて取つて代られたが、此れを知るとまもなく一六八八年一月廿八日に死去してしまつた。

その葬儀は壯麗に營まれ、彼の墓は利瑪竇の墓所の近くに作られた。

近頃、自耳義王アルバート(Albert)も南懷仁を賞讃して「一七世紀支那に於ける最大の宣教師なり」と云はれたさうである。

又、南氏は多くの漢文書物の著述者であり、

且つ、支那地圖底本製作者の一人でもあつた。其等の中、次節に於いて彼の世界地理に關する述作を擧げて、其の由來其他に就いて解説を試みたい。

(一)「大注、康熙二十八年鑄造、武成永固大將軍用、製法官南懷仁」として、次に滿洲文字の刻された大砲が福岡市宮崎神社の境内に一門ある。

(二) 此の一節はこの小論の主題ではないので簡単に記す爲主として S. Couling: The Encyclopaedia Sinica p. 588 に據つた。やゝ詳しくは、黃伯祿著正教奉養、稻葉君山氏著清朝全史上卷、矢野仁一氏著近世支那外交史、山口昇氏編歐米人の支那に於ける文化事業等(以上容易に見得るもの)を参照せられたい。

三、西方要紀

西方要紀一卷は南懷仁一人の著述ではない。アンリ・コルディエの「第十七・第十八世紀に於て歐洲人が支那に於て出版した著述の書目」(Bibliographie des ouvrages publiés en Chine par les Européens au XVII^e et au XVIII^e siècle. Paris 1901. par M. Henri Cordier)に

は利類思の部に入れ、安文思・南懷仁の共著となつてゐる。

筆者は今、此書の單行本を見ることが出来ないが、康熙丁丑(一六九七)に刊行された昭代叢書(張潮編)甲集卷二十七の西方要紀にも明らかに「泰西利類思安文思南懷仁著」となつてゐるから此書の著者は右三名と見て誤りはなからう。

此の叢書中の西方要紀に據つては著述刊行の年月を明にし難いが、前掲コルディエの書目に據れば一六六八年に記した利類思安文思及南懷仁の序文がついて、其の翌年一六六九年の日附で刊行されたものらしく、其名は御覽西方要紀となつてゐる。^(一) 此書名の如く内容(最後の西士の條)から見ても此書は康熙帝の下間に答へたものを編述して出来たものであらうと思はれる。

其の内容を覗ふ爲に此書の分つ二十項目を舉ぐれば、國土(五大洲等)、路程(西歐より中國への海陸路等)、海船(洋船の構造・船員等)、海奇(珍奇なる魚類等)、土產(歐羅巴の農・鑛產物等)、

製造(工藝的生産品等)、西學(西歐の學制等)服飾・風俗・法度・交易(貨幣其他)、飲食・醫學・性情(歐人の尙直・重信の情)、濟院(病院・養老院等)、宮室、城池兵備、婚配、教法(天主教)、西士(支那在住耶穌會士のことを記す)、となつてゐる。斯く此書は別に統一も順序もなく、康熙帝の下間に答へた歐羅巴人文地理を雜然と記したものである。

(一)「御覽西方要紀 Yu lan si fang yao ki—Mémoires sur les pays d'Occident (d'Europe). Daté de 1669, avec un rapport(1668) des P. Buglio, de Magalhaens et Verbiest.」(前掲書八頁)

四、坤輿圖說

此の書は次節の坤輿全圖初版(一六七四)に先立つこと二年、一六七二年に上下二卷本として刊行された。^(二)錢熙祚の編輯した「指海」叢書の中に入れられてゐるが、筆者は殘念ながら未だに單行本も叢書本も見ることが出来ない。^(三)四庫全書總目提要の坤輿圖說解說に従へば「是書上

卷、自坤輿至人物、分十五條、皆言地之所生、下卷載海外諸國道里山川民風物產、分爲五大洲、而終之以西洋七奇圖說、大致與艾儒略職方外紀「互相出入、而亦時有詳略異同」(返點筆者)とあり、又魏源の編する海國圖志卷七六國地總論下に「南懷仁坤輿圖說」として引用された文章を見ると幾分の出入はあるが殆ど後述坤輿全圖の記事と一致するものである所から推察して、上卷の十五條は後に見る坤輿全圖中地理通論的記述としての記事中十六條の「海舶」だけ性質上除いた十五條と大體同様のものであらうと想はれる。下卷はやはり坤輿全圖の五大洲各々の總說や各地の地誌を輯めたものと大同小異のものであらう。其他四庫總目に據れば此書は東方朔の神異經や周密の癸辛雜識等と同一の記事を持つてゐるさうであるが、此の邊りが職方外紀と相違する主點であらう。アンリ・コルデイエは其の書目(前掲)に此書に就いて、艾儒略と共著の如くに扱はれてゐるが、(坤輿圖說

Kouen yu tou chou. — Cosmographie. par le P. Verbiest et le P. Aleni.) 艾儒略は既に之より先二十餘年前(一六四九年)に死去してゐるから此書の述作に與つてゐないことは云ふまでもない。

此れは艾氏と共著としたい程艾氏の職方外紀と南氏の坤輿圖説とは共通の點が多いからコルヂエをして斯る不思議な錯誤を犯さしめたものであらう。尤も南氏は坤輿圖説を著すに際して職方外紀の記事を其儘採つた所が多いのであらうから、實質上からはコルヂエの云ふ如く艾氏との共著と見るのが至當かも知れない。然し例へ内容を其儘採つたにしろ形式上はコルヂエの解説は誤りである。

- (一)「南氏於一六七三年、又刊印坤輿圖説二冊、爲解釋坤輿全圖之用」云々(徐宗德著明末清初瀕輪西學之偉人、一六)
- (二) 東洋文庫・靜嘉堂文庫・帝國圖書館等にも此書(叢書・單行本)は見當らない。
- (三) ワイリの書目にも艾儒略の職方外紀解説に續いて

“About half a century later, Ferdinand Verbiest

南懷仁が支那に紹介した世界地理書に就て

published another small geographical work, entitled 坤輿圖説 K'wan yu t'oo shw'ü, agreeing in the main with Aleni's, but containing further information on some points.” (Wylie: Note on Chinese Literature p. 58) とある。

五、坤輿全圖

南懷仁の支那に紹介した世界地理の中此の坤輿全圖は最も重要なものである。此の世界圖刊行に就いて一般には

- 一、康熙十三年(一六七四)、北京刊
- 二、咸豐六年(一八五六)、廣東刊
- 三、咸豐十年(一八六〇)、朝鮮京城刊

等が知られてゐる。然し秋岡武次郎教授の御示教に據れば此外にも數回刊行されてゐるさうである。右に挙げた三本は大體同形であるが朝鮮重刊圖は其の説明記事の配置等に多少の異同がある。此の世界圖は全體を八枚に分け(一幅が六四〇耗×一六八二耗、圖の圓の最内徑一四五五耗、秋岡武次郎教授著地圖學史三三頁に據る)て木版刷にした大地圖で有名な利瑪竇の坤輿萬

國全圖と殆ど同様の幅員を持つが、圖式は兩者相異り、利氏世界圖が所謂アピアヌス投影法と呼ばれる卵形圖であるに對し、南氏の坤輿全圖は赤道表面投影に依る兩半球圖である。

其の中には利瑪竇世界圖と同様漢文の地理的説明があり、更に奇怪なる動植物等の繪畫が記入されてゐる。八枚一組の中兩端の各一幅は共に地圖とは獨立に「四元行之序並其形」「地球南北兩極必對天上」南北兩極不離天之中心「(返點筆者)」「地圖」「地體之圖」「地震」「人物」「江河」「山岳」「雨雲」「或問潮汐之爲理者何也」「風」「海之潮汐」「氣行」「海水之動」等の條項を設けて自然地理的説明をなしてゐる。又此等と同列に置かるべき「海族」「海舶」の説明が圖中に記されてゐる。南氏坤輿全圖に於いて右は地理通論とでも云はるべきものである。

次に五大洲に就いては先づ總論が試みられる特に歐羅巴には「歐羅巴總說」、亞弗利加には「利末亞總說」と項目を記してゐる。

それに次いで各地に就いて雜然たる地理的説明が註記されてゐる。南氏坤輿全圖は利瑪竇の世界圖や艾儒略の職方外紀所載萬國全圖等とは相當長い時間的距離があるので全般的には前者より餘程眞に近づいてゐる。然し、註記された圖說に至つては五十餘年前の艾氏職方外紀の記事を其の儘採つて記入したと見られる所が多い。而して職方外紀は其の名の如く支那及び其の勢力範圍の地理を缺くのであるが南氏の坤輿全圖は支那は勿論其他亞細亞全部の地理を備へてゐる。一例を舉ぐれば職方外紀には我國の地理を缺くが、南氏坤輿全圖に於いては「日本、乃海内一大島、長三千二百里、寬不_レ過_二六百里_一、今有_二三十六州_一、各有_二國主_一、俗尙_二強力_一、雖_レ有_二總王_一、權常在_二強臣_一、其民多習_二武_一、小習_二文_一、土產_二銀鐵好漆_一、其王生_二子_一、年三十、以_レ王讓_二之_一、其國大抵不_レ重寶石、只重_二金銀及古密器_一」(返點筆者)とあり、此の記事は一六〇二年の利瑪竇世界圖と全く同文である。其他職方外紀の缺く亞細亞

洲中の地理は利氏世界圖と同文の所が多い。然しこゝで注意すべきは日本圖の方は舊い利氏世界圖の方が遙かに眞に近いことである。利氏世界圖中の日本圖は籌海圖篇又は其れと同系のものに據つたと思はれる五十餘ヶ國が記入されてゐるが、南氏坤輿全圖中の日本圖には「亞法・麥打記・依門・點亞哥・米畫米・喜粗米・亞記・那加多」と云ふいかにも外國地圖から其儘音譯したかと思はれる地名が記入されてゐるだけで、此點利氏世界圖より退歩してゐる。

これに依つて見ると、南氏は地圖に於いては利・艾二氏のものを見ても其れに據らず、獨立に他の原本に従つて描き、圖說に於いては逆に殆ど艾氏職方外紀に従ひ、足らざる所を利氏世界圖又は彼自身の知識に依つて補つたと見られる。猶、他の想像を回らすなら、艾儒略の職方外紀の原本となつた世界圖と南氏の坤輿全圖の據る世界圖とは同一のものかとも一應は考へられる。然し地圖は兩者全く形式を異にしてゐる。

南懷仁が支那に紹介した世界地理書に就て

ので、こゝではいづれかゝ原本とは相違してゐることになるのである。従つて寧ろ南氏は地圖と圖說とは別々に依據する所があつたと考へた

(一) 南氏坤輿全圖原版(一六七四)は我國では東洋文庫並に秋岡武次郎教授が所藏せられ、朝鮮重刊本は板木(兩端圖說の

二幅を缺く)六枚が京城帝大に所藏せらるゝ由。

(二) 大體籌海圖篇の日本圖と同様の順序で、北の方から、佐渡・能登・加賀・越中後・常陸・武藏・安房・伊豆・上下總・駿河・遠江・三河・田羽・陸奥・上下野・信濃・飛騨・美濃・近江・丹後・但馬・因幡・伯岐・山城・河内・大和・和泉・攝津・播磨・石見・出雲・隱岐・備前中後・美作・安藝・周防・長門・紀伊・防波・伊豫・土佐・豊前後・筑前後・肥前後・薩摩等の諸國が記るされてゐる。攝摩は何處を指すか分らぬが籌海圖篇や之と同系の日本圖には記入されて、一の特徴をなす國名である。

(三) 南氏坤輿全圖亞細亞洲には利氏世界圖と同一の註記をなした所が多い。猶、拙稿「艾儒略の職方外紀に就いて」(地球二三の五)に艾・南二氏の説明文が等しい所が多いことを以て、原本を考ふるに何等かの手がかりになるかと記して置いたが、斯うした見方をすると、其れは無駄であつた

猶南氏坤輿全圖原本に就て藤田元春先生は千六百六十年前後の原圖とされてゐる。(藤田氏日本地理學史二九五頁)

(未完)